

【優秀論文】

# 絵本『くまのがっこう』における直接性の演出

～「言葉のリズム」と「語り」の観点から～

3年4組23番 寺田穂乃香

## I はじめに

あいはらひろゆきとあだちなみによる『くまのがっこう』シリーズは2002年に第1作が発行されて以来、20年以上もの間愛され続けている絵本シリーズだ。11匹のお兄ちゃんくま達と、末っ子の主人公ジャッキーによって繰り広げられる「くまのがっこう」のとある一日が描かれた作品である。第1作品目の『くまのがっこう』では五や七の語数の言葉が多くみられ、リズムカルな絵本に仕上がっている。対して第15作品目である『ジャッキーのしあわせ』ではキャラクターの「語り」によるやり取りに焦点が当てられている。

本論文では、この絵本に現れる「言葉のリズム」「語り」に注目し、以下の手順に沿って論じていきたい。第一に、日本語における「言葉の四拍子性」という概念を提示する(Ⅱ)。第二に、物語中に現れる四拍子性の発現回数を調査し(Ⅲ)、その変化を物語内の「語り」と関連付けて論じていく(Ⅳ)。そして最後に、『くまのがっこう』シリーズが作り出す「直接性」の変化について考察していきたい(Ⅴ)。

## Ⅱ 『くまのがっこう』と言葉の四拍子性

「くまのがっこうのくまのこたちは1, 2, 3, 4……ぜんぶで12ひき。」この書き出しから『くまのがっこう』の物語は始まる。2022年時点で、累計発行部数は222万部を超えており、日常の温かみを感じる物語と色彩豊かな絵が楽しめるこのシリーズは、今でも幅広い世代の人々に親しまれている。

シリーズ第1作品目の『くまのがっこう』の特徴の一つとして「言葉の四拍子性」が非常に強いということが挙げられる。

「言葉の四拍子性」とは和歌や俳句など日本の短詩形文学のリズムを作る重要な性質である。和歌や俳句のリズムは四分の四拍子であり、音符として書き表すことができるのだ。一例として、松尾芭蕉の「五月雨を集めて早し 最上川」<sup>1</sup>という発句を四分の四拍子で書き表してみよう。【譜例1】



【譜例1】「五月雨を集めて早し 最上川」のリズム

「さみだれを」の後ろに三分、「あつめてはやし」の後ろに一分、「もがみがわ」の後ろに三分の休止が置かれる。

このように「五や七の語数」を持つ韻文は四分の四拍子として書き表すことができる。日本人は和歌や俳句等を無意識のうちに四分の四拍子で読んでいるのである。そのため和歌や俳句等を読む際、私たちは心地良さを感じることができるのだ。

それでは、言葉の四拍子性の構造についてみていこう。

この四拍子性という日本語の特質を支える要因の一つは「日本語の等時性」である。

<sup>1</sup> 松尾芭蕉/井本農一・弥吉菅一・横沢三郎・尾形竹校注(1989)『芭蕉全集第六巻』富士見書房、p.124

<sup>2</sup> 譜例として表すにあたって別宮貞徳『日本語のリズム』を参考に、一音節を八分音符とした。以降、本論における譜例は本書を参考にしたものとする。

日本語の等時性とは「どの音（音節<sup>3</sup>）もほぼ同じ長さ（時間）で発音される」<sup>4</sup>という性質のことである。日本語のひらがな一文字はどの一文字でも大方同じ時間で発音されているのだ。言語学者の金田一春彦は、日本語のリズムについて「日本語には高低アクセントはあるが、強弱アクセントはない。このことから、日本語の各拍は、日常の会話でも、同じ長さに発音される傾向が強い」<sup>5</sup>と述べている。

この「日本語の等時性」という性質によって文字、言葉のリズムを音符として表すことが可能となる。一例として「たまねぎ」のリズムを音符として【譜例2】に表してみた。



#### 【譜例2】 音符で表された「たまねぎ」のリズム

このようにして「たまねぎ」が発音される際のリズムを音符で表すことができる。等時性を持つ日本語は音符として表すことが可能なのである。

「言葉の四拍子性」を生み出すもう一つの要因として日本語は一音を避け、二音の語を好むという性質を持つということが挙げられる。

この性質について英文学者の別宮貞徳は次のように述べている。

「葉」を単独に、「葉」として使うことは、むしろ少ないのではないか。日常の会話では、本来幼児語である「ハッパ」を多用し、それではあまりに幼稚な感じがするときには「キノハ」あるいは「コノハ」という。（中略）このとおり、われわれは一音節の言葉を嫌っていて——あるいは苦手としていて、だいたいその数が少ないばかりでなく、使うばあいにも、ほかの言葉をつなげたり、音を重ねたり、延ばしたり、なんとか多音節にしようと苦心している。<sup>6</sup>

普段の生活の中で一音節つまり一文字の名詞を使うことはめったにない。尾は「しっぽ」と言い換えられるし、輪は「わっか」と言い換えることができる。日本語には一音節を避けるといった性質があるのだ。

二音で一拍のまとまりは日本人にとってなじみのあるものであり、その重なり四つ分である四拍子は日本人になじみ深いリズムなのだ。

四拍子というリズムになじみのある私たちは様々なものを四拍子としてとらえている。「三・三・七拍子」、「一本締め」のリズムもそうである。「心地よい」と感じるリズムは、たいていの場合四拍子なのだ。

このような言葉の四拍子性が『くまのがっこう』シリーズでは多く発現している。シリーズ第1作品目の『くまのがっこう』では、平均で一ページにつき一度の頻度で四拍子性を持つ表現が現れている。例を挙げると、「きょうの おはなし どんなかな。」<sup>7</sup>【譜例3】や「マッシュポテトに おまめの スープ あったかミルクも できあがり。」<sup>8</sup>【譜例4】等の表現に四拍子性が見られる。

<sup>3</sup> 音声の流れにおける最小のまとまりある単位、ここではひらがな一文字分の音のことを指す

<sup>4</sup> 別宮貞徳（1977）『日本語のリズム』講談社、p.48

<sup>5</sup> 金田一春彦（1988）『日本語 新版（上）』岩波新書、p.125

<sup>6</sup> 前掲『日本語のリズム』pp.54-55

<sup>7</sup> あだちなみ、あいはらひろゆき（2002）『くまのがっこう』プロンズ新社、p.9

<sup>8</sup> 前掲『くまのがっこう』p.15



【譜例3】「きょうのおはなし どんなかな」のリズム



【譜例4】「マッシュポテトに おまめのスープ あったかミルクも できあがり」のリズム

本論文では、『くまのがっこう』シリーズにおける四拍子性の発現、キャラクターによる「語り」の変遷を5作品ごとに初期、中期、後期と分けて調査し、この絵本シリーズの変化について考察することにした。

今回分析する『くまのがっこう』シリーズ全15作品の題名、発行年月日を【表1】として整理した。

	題 名	発行年月日
1	くまのがっこう	2002年8月20日
2	ジャッキーのパンやさん	2003年2月25日
3	ジャッキーのじてんしゃりょこう	2003年7月25日
4	ジャッキーのおせんたく	2004年2月25日
5	ジャッキーのおたんじょうび	2005年7月25日
6	ジャッキーのうんどうかい	2006年8月25日
7	ジャッキーのいもうと	2007年2月25日
8	ジャッキーのトマトづくり	2008年2月25日
9	ジャッキーのたからもの	2009年1月25日
10	ジャッキーのはつこい	2010年2月25日
11	ジャッキーのゆめ	2012年2月25日
12	ジャッキーのクリスマス	2012年11月25日
13	ジャッキーのしんゆう	2013年9月25日
14	ジャッキーつきへいく	2015年8月25日
15	ジャッキーのしあわせ	2017年1月25日

【表1】『くまのがっこう』シリーズ全15作品の題名と発行年月日

では次章以降、どのようにこの『くまのがっこう』シリーズが変化していくのか見ていくことにしたい。

### Ⅲ 「言葉のリズム」の観点からみる『くまのがっこう』シリーズの変化

#### (1) シリーズ初期

最初に『くまのがっこう』シリーズ初期5作品における四拍子性の発現についてみていこう。

シリーズ初期として分類した作品は『くまのがっこう』『ジャッキーのパンやさん』『ジャッキーのじてんしゃりょこう』『ジャッキーのおせんたく』『ジャッキーのおたんじょうび』の5作品である。この5作品は、2002年から2005年までの約3年間の間に発行された。初期5作品の中で四

拍子性を持つ文がみられた回数を【表2】に整理した。

【表2】 初期作品における四拍子性の発現回数

作品名	発現回数 (回)
くまのがっこう	33
ジャッキーのパンやさん	25
ジャッキーのじてんしゃりょう	22
ジャッキーのおせんたく	24
ジャッキーのおたんじょうび	20
平均	24.8

【表2】から初期5作品のうち最も四拍子性が強く現れているのは33回の1作品目『くまのがっこう』であり、最も四拍子性の弱い作品は20回でシリーズ5作品目の『ジャッキーのおたんじょうび』であるということがいえる。5作品全体の平均発現回数は24.8回となった。七五などの2小節分の表現が多い中、『くまのがっこう』では「よるがきて もりふくろうが なきだすと」<sup>9</sup>【譜例5】といった五七五に読むことができる3小節分の表現や【譜例4】として示した4小節分のものがあり、四拍子性の強い作品であるということが分かる。



【譜例5】「よるがきて もりふくろうが なきだすと」のリズム

## (2) シリーズ中期、後期

次にシリーズ中期、後期における四拍子性の発現について見ていきたい。

シリーズ中期として分類したのは『ジャッキーのうんどうかい』『ジャッキーのいもうと』『ジャッキーのトマトづくり』『ジャッキーのたからもの』『ジャッキーのはつこい』の5作品である。この5作品は2006年から2010年までの約4年間の間に発行された。

そしてシリーズ後期として分類した作品は『ジャッキーのゆめ』『ジャッキーのクリスマス』『ジャッキーのしんゆう』『ジャッキーつきへいく』『ジャッキーのしあわせ』の5作品である。この5作品は2012年から2017年までの約5年間の間に発行された。

四拍子性の発現回数について中期5作品のものを【表3】に、後期5作品のものを【表4】に整理した。

【表3】 中期作品における四拍子性の発現回数

作品名	発現回数 (回)
ジャッキーのうんどうかい	23
ジャッキーのいもうと	10
ジャッキーのトマトづくり	25
ジャッキーのたからもの	17
ジャッキーのはつこい	21
平均	19.2

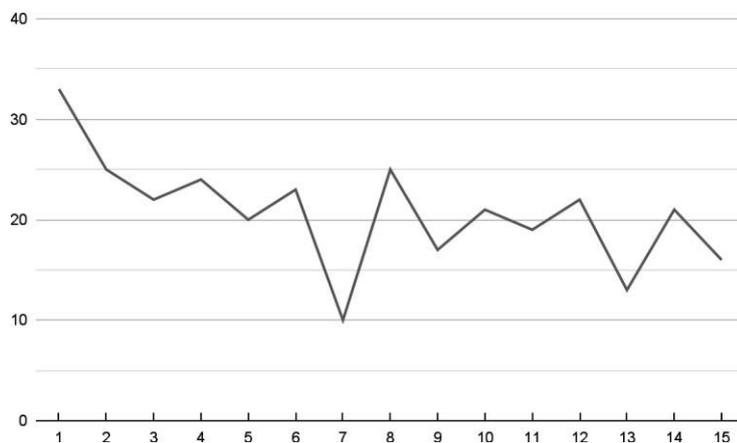
<sup>9</sup> 前掲『くまのがっこう』p.21

【表4】 後期作品における四拍子性の発現回数

作品名	発現回数 (回)
ジャッキーのゆめ	19
ジャッキーのクリスマス	22
ジャッキーのしんゆう	13
ジャッキーつきへいく	21
ジャッキーのしあわせ	16
平均	18.2

【表3】【表4】 から、シリーズ中期で最も四拍子性が強い作品は25回発現が確認できた『ジャッキーのトマトづくり』でシリーズ後期では22回発現していた『ジャッキーのクリスマス』だといえる。四拍子性の発現回数の平均はシリーズ中期で19.2回、シリーズ後期で18.2回という結果となった。

全体から見るとシリーズを通して四拍子性の一番弱かった作品は『ジャッキーのいもうと』、一番強かったものは『くまのがっこう』であった。平均発現回数は初期、中期、後期の順に大きく、初期作品と後期作品の平均発現回数を比べると、初期から後期にかけて6.6回減少していた。これらのことから、四拍子性は減少傾向にあるとみることができる。発現回数の推移をグラフにすると【図1】のようになる。



【図1】 四拍子性の発現回数の推移

【図1】として示したグラフがやや右下がりなことから傾向として四拍子性は弱まってきているといえるだろう。

これらの表、そしてグラフからシリーズ全体を通して四拍子性の発現回数は減少傾向にあるということがわかった。それではこの性質は絵本の中でどのような効果を持つのだろうか。

リズムと子供の関係について幼児教育学を専門としている古市久子は次のように述べている。

身体を動かすことが楽しいのは、リズムが合うことで、仲間と一緒にいることが実感でき、すぐに達成感が持てることであり、その楽しさは倍加する。そして、躍動感の高まりがクライマックスとして燃焼することで、エネルギーを発散させて、こども本来の生きる喜びを得る。リズムカルな絵本にはこの要素が含まれているが、体を動かすわけではないという疑問が出てくる。しかし、絵本の場合も、自分の持つリズムの予期と合致できた同期に対する喜びや、集団の場合には、仲間との共振関係の中での喜びは、何にもまして心的満足をもたらす。<sup>10</sup>

<sup>10</sup> 古市久子 (2012) 「絵本が持つリズム性がこどもに与える教育的意味」『東邦学誌』第41巻第1号所収、p.120

「リズムを感じ、楽しむ」という点で「身体を動かすこと」と「絵本を読むこと」は似通っている。子供は絵本のリズムを感じ、それに対し期待する。子供の心に内在する期待が次第に高まり、思い描いたリズムと感覚的に通じ合うことで喜び、楽しみを感じるのだ。四拍子が持つ躍動感を感じ取り、絵本の「動的楽しみ」を知る。「言葉の四拍子性」は子供の身体へ直接働きかけるものなのである。初期作品では、「言葉のリズム」によって「直接性」を演出しているのだ。

四拍子性はこのように子供たちの「身体に直接」動的楽しみを与えるのであり、特に初期作品にはその傾向が顕著に見られた。それは先の述べたとおりである。しかし『くまのがっこう』シリーズは次第にその四拍子性を薄めていくのである。「言葉のリズム」によって演出されていた「直接性」は失われていくのだ。それでは中期、後期作品では「言葉のリズム」に代わり、何によって絵本の直接性が演出されていくのだろうか。

次の章で考えてみることにしよう。

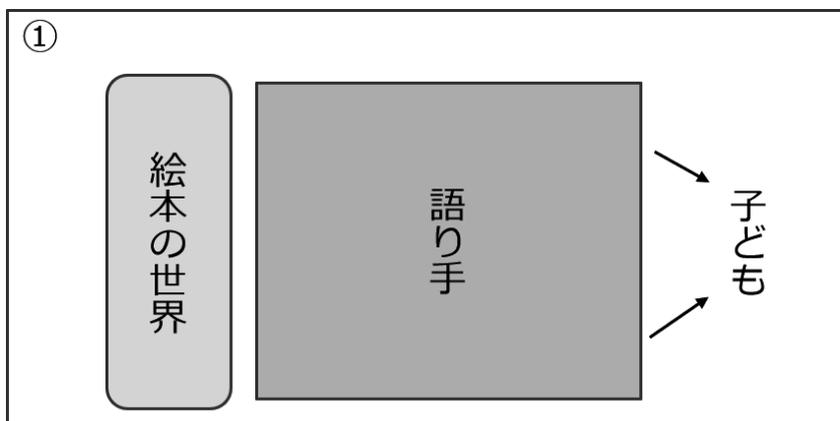
#### IV 「語り」の観点からみる『くまのがっこう』シリーズの変化

##### (1) シリーズ初期におけるセリフ数の推移

「言葉のリズム」による直接性が次第に影をひそめていくのは前章で述べた通りである。しかし、中期、後期の作品はまた別の形での直接性の演出を行って行くのだ。それはキャラクターの「語り」による直接性の演出である。本章ではその「語り」による直接性の演出について論じていきたい。

「語り」は絵本の世界と読者との距離感を変化させる要因の一つだ。

セリフ数が少なく、語り手の地の文が多い場合では、物語の進行役は語り手が担うことになる。この場合、物語内での語り手の存在は大きく、物語の世界と読者は遠い関係になる。その状態を表したのが【図2】である。



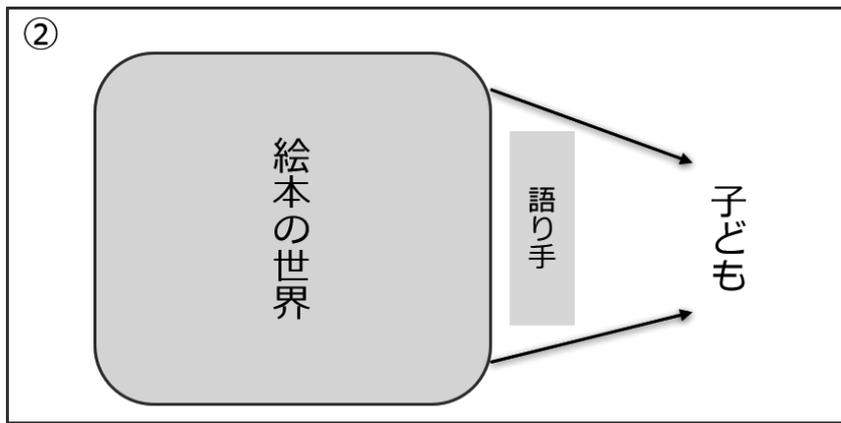
【図2】「語り」によって演出される距離感①

三人称で書かれる作品では絵本の世界と読者の間に語り手があり、地の文を読者に読ませることによって語り手は物語を読者へと伝えているのだ。セリフ数が少なく、語り手の存在が大きいため絵本の世界と子どもとの距離は離れており、キャラクター達の声は子どもに届きにくい状況になっている。

それに対し、セリフ数が多く、地の文が少ない場合ではどうだろうか。【図3】としてこの状態を表した。

セリフ数が多く、地の文が少ない場合、物語の進行役は登場人物が務めることになる。語り手の存在が小さく、登場人物による「直接話法」が多用されているため、絵本の世界の音は「直接」読者へと届くことができるのである。セリフ数が多いことで絵本の世界と読者である子どもとの距離感は近づくのだ。このようにして「語り」は絵本における「直接性」を演出するのである。

このことから「言葉のリズム」とはまた別の直接性の演出方法の一つとして「語り」によるも



【図3】「語り」によって演出される距離感②

のを挙げるができる。このような「語り」による直接性が『くまのがっこう』シリーズではみられるのだろうか。まずは、シリーズ初期の5作品におけるセリフ数の推移をみてみよう。

5作品ごとのセリフ行数と全行に対するセリフ行数の割合を【表5】に整理した。セリフ行数の割合は小数第3位で四捨五入している。調査するにあたって、キャラクターたちから直接発せられている表現を対象とするために、「手紙」の文は対象に含めないこととした。

【表5】シリーズ初期作品におけるセリフ数の変遷

作品名	セリフ行数（行）	全体に対する割合
くまのがっこう	5	7.25%
ジャッキーのパンやさん	16	14.68%
ジャッキーのじてんしゃりょうこ	7	7.37%
ジャッキーのおせんたく	7	7.78%
ジャッキーのおたんじょうび	10	10.3%
平均	9	9.48%

【表5】からシリーズ初期作品におけるセリフ数は少なく、ほとんどが地の文によって書かれているということがわかった。地の文が多いということは物語の進行役は語り手であり、物語に登場するくまたちではないのだ。セリフが少ないということは、物語の中から実際に聞こえてくる声が読者には直接届いてこないということであるといえる。

では次にシリーズ中期、後期におけるセリフ数の推移に注目してみよう。

## (2) シリーズ中期、後期におけるセリフ数の推移

シリーズ中期、後期におけるセリフ数はどのような推移をしているのだろうか。シリーズ中期のセリフ数を【表6】、後期のものを【表7】に整理した。割合の数値は【表5】と同様に小数第3位で四捨五入している。

【表6】 シリーズ中期作品におけるセリフ数の変遷

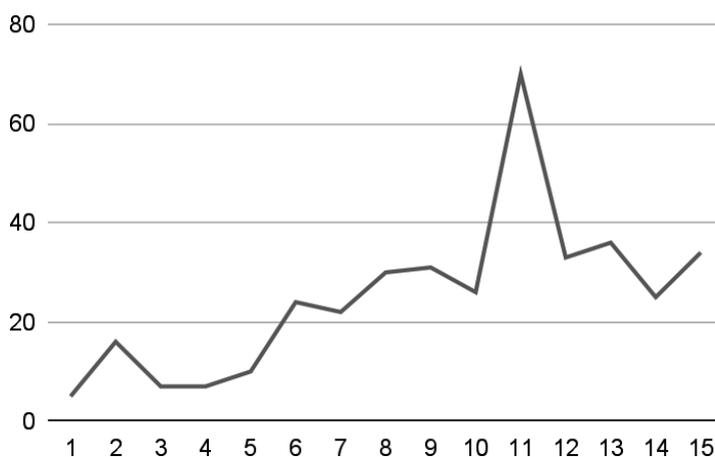
作品名	セリフ行数（行）	全体に対する割合
ジャッキーのうんどうかい	24	25%
ジャッキーのいもうと	22	23.16%
ジャッキーのトマトづくり	30	22.06%
ジャッキーのたからもの	31	21.23%
ジャッキーのはつこい	26	20.16%
平均	26.6	22.32%

【表7】 シリーズ後期作品におけるセリフ数の変遷

作品名	セリフ行数（行）	全体に対する割合
ジャッキーのゆめ	70	66.04%
ジャッキーのクリスマス	33	28.45%
ジャッキーのしんゆう	36	39.56%
ジャッキーのつきへいく	25	21%
ジャッキーのしあわせ	34	30.63%
平均	39.6	37.14%

【表6】、【表7】 から中期、後期作品は初期作品と比べてセリフ数が多いということが分かった。特にシリーズ第11作品目の『ジャッキーのゆめ』では全体の半分以上がセリフで展開されている。この作品はお兄ちゃんくまたちがジャッキーに「ジャッキーは おとなに なったら / なにになりたいの？」<sup>11</sup>と問いかけ、ジャッキーが「あたしが おとなに なったらね……」<sup>12</sup>と自分の夢を語っていくという流れが「5回」繰り返されていく。ジャッキーとお兄ちゃんたちとの会話を中心に物語が進んでいくために全体に対するセリフの割合が高いのだと考えられる。

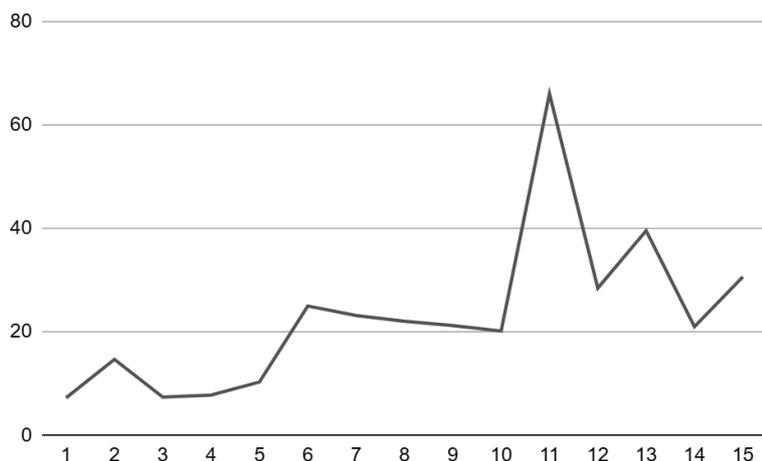
では、シリーズ全体を通したセリフ数の推移をみてみよう。セリフの行数の推移を【図3】、全行に対するセリフ行の割合の推移を【図4】に整理した。



【図3】 セリフ数の推移

<sup>11</sup> あだちなみ、あいはらひろゆき (2012) 『ジャッキーのゆめ』 ブロンズ新社、p.4

<sup>12</sup> 前掲『ジャッキーのゆめ』 p.5



【図4】 全行に対するセリフ行の割合の推移

【図3】【図4】から物語内のセリフ数は初期から後期にかけて増加傾向にあるといえる。また、全行に対するセリフ行の割合は、初期が9.48%、中期作品は22.32%、後期は37.14%と増加傾向にあるということが【表5】【表6】【表7】からも読み取ることができる。

このことから後期作品は絵本の世界と子どもとの距離をセリフの多さによって近づけようとしていると言える。セリフ数の増加、それに伴う地の文の減少により、絵本『くまのがっこう』の世界と子どもとの距離は近づいたのである。絵本に登場するくまたちの「直接話法」により、子どもたちは絵本の世界との直接的な結びつきを得たのだ。後期作品における直接性は、くまたちの「語り」によって演出されているのである。

シリーズ初期作品では、「言葉のリズム」によって演出されていた直接性だが、後期作品へと移っていく中でそれは失われていく。「言葉のリズム」による直接性の演出に代わり、後期作品では「語り」がその役割を果たしていくことになるのである。

## V 絵本『くまのがっこう』シリーズにおける変化

ここまで本論文では絵本『くまのがっこう』シリーズにおける直接性の演出について「言葉のリズム」と「語り」に注目しながら論じてきた。

シリーズ初期作品は四拍子性が強く、その躍動感を子供たちは楽しんでいた。子どもの身体へ働きかける「言葉のリズム」によって直接性は演出されていたのである。その後、四拍子性は中期、後期にかけて弱まっていく。それに対してセリフ数は増加していった。セリフ数の増加は物語の世界と子どもとの距離を近づける。「直接話法」により、絵本の世界のくまたちは読者である子どもたちへ「直接」語り掛けるのである。後期作品では、絵本に登場するくまたちの「語り」によって直接性が演出されていたのだ。

これらのことから、絵本『くまのがっこう』シリーズは直接性の演出の仕方が四拍子性の生み出す「言葉のリズム」によるものから、くまたちの「語り」によるものへと変化していく物語であるといえる。

あいほひろゆきは、このように直接性の演出を変えていくことで作品に変化をもたらしたのである。

この「直接性」はこの絵本シリーズの魅力の一つであるだろう。「直接性」があることにより、この絵本の世界に子どもだけでなく大人までも惹きつけられていくのだ。

『くまのがっこう』のくまのこたちは今日も多くの人々の心の中で和気あいあいと暮らし続けている。

(8240文字 原稿用紙20.6枚相当)

### 【参考文献および関連URL】

- あだちなみ・あいはらひろゆき (2002) 『くまのがっこう』 ブロンズ新社
- あだちなみ・あいはらひろゆき (2003) 『ジャッキーのパンやさん』 ブロンズ新社
- あだちなみ・あいはらひろゆき (2003) 『ジャッキーのじてんしゃりょこう』 ブロンズ新社
- あだちなみ・あいはらひろゆき (2004) 『ジャッキーのおせんたく』 ブロンズ新社
- あだちなみ・あいはらひろゆき (2005) 『ジャッキーのおたんじょうび』 ブロンズ新社
- あだちなみ・あいはらひろゆき (2006) 『ジャッキーのうんどうかい』 ブロンズ新社
- あだちなみ・あいはらひろゆき (2007) 『ジャッキーのいもうと』 ブロンズ新社
- あだちなみ・あいはらひろゆき (2008) 『ジャッキーのトマトづくり』 ブロンズ新社
- あだちなみ・あいはらひろゆき (2009) 『ジャッキーのたからもの』 ブロンズ新社
- あだちなみ・あいはらひろゆき (2010) 『ジャッキーのはつこい』 ブロンズ新社
- あだちなみ・あいはらひろゆき (2012) 『ジャッキーのゆめ』 ブロンズ新社
- あだちなみ・あいはらひろゆき (2012) 『ジャッキーのクリスマス』 ブロンズ新社
- あだちなみ・あいはらひろゆき (2013) 『ジャッキーのしんゆう』 ブロンズ新社
- あだちなみ・あいはらひろゆき (2015) 『ジャッキーつきへいく』 ブロンズ新社
- あだちなみ・あいはらひろゆき (2017) 『ジャッキーのしあわせ』 ブロンズ新社
- 金田一春彦 (1988) 『日本語 新版 (上)』 岩波新書
- 金田一春彦 (1988) 『日本語 新版 (下)』 岩波新書
- 佐々木宏子 (2000) 『絵本の心理学 子どもの心を理解するために』 新曜社
- 別宮貞徳 (1977) 『日本語のリズム』 講談社現代新書
- 松尾芭蕉/井本農一・弥吉菅一・横沢三郎・尾形侑校注 (1989) 『芭蕉全集第六巻』 富士見書房
- 森岡健二 (1988) 『文体と表現』 明治書院
- 守屋慶子 (1994) 『子どもとファンタジー 絵本による子どもの「自己」の発見』 新曜社
- 坂野信彦 (1978) 「なぜ五音・七音か-音数既定の謎を解く-」 『中京大学教養論叢』 第19巻第2号所収
- 鈴木智之 (2014) 「『四拍子論』を活用した日本語リズムの客観的分析」 『一橋日本語教育研究』 2号所収、ココ出版
- 古市久子 (2012) 「絵本がもつリズム性がこどもに与える教育的意味」 『東邦学誌』 第41巻第1号収書